

令和元年6月5日現在

機関番号：17201
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2016～2018
 課題番号：16K02684
 研究課題名(和文) 児童生徒のグループ談話におけるコミュニケーション力の習熟方法の社会言語学的研究

 研究課題名(英文) A sociolinguistic study of learning methods of communication skills in group discourse of children

 研究代表者
 達富 洋二 (TATSUTOMI, Yohji)

 佐賀大学・教育学部・教授

 研究者番号：40367983
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では設定していた3課題の解決を通して、グループ談話を創造的なものにするためには10のコミュニケーション力が必要であることを明らかにすることができた。それは、談話の参加者を尊重する力、談話の価値を共有する力、談話の参加者間で見通しを立てる力、談話の参加者間で発話機会を提供し合う力、談話中に情報を思考操作する力、談話中に自分の考えの根拠を点検する力、談話中に問いを更新する力、談話中に自分の考えを修正する力、複数の方法で説明する力、共通の語彙を使う力、である。このことは、対話的な学びが重視されるこれからの学校教育における対話の指導法に大きな示唆を与えるものだと考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2020年以降の新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められているが、対人での「対話的な学び」のためにはグループコミュニケーション力の習得が必要である。「声の大きさや速さ」等の音声的な技術だけではなく、「誰と話し合うか、何のために話し合うか、話し合いをどのように創りあげるか」という談話を創造的なものにするための社会的技能が必要である。「児童生徒のグループ談話におけるコミュニケーション力の習熟方法の社会言語学的研究」は、グループ談話を創造的なものになりたいと願いながらも、それを現実させるための具体的な指導法をもたない教師にとって、有効な指導法を示唆するものであると考えられる。

研究成果の概要(英文)：What has become clear in this study is that "10 communication skills are required for a group discussion to be creative". The following is the result of the study. We need to respect the discourse participants. We need to share the value of the discourse. Plans are needed to advance the discourse. We need to provide an opportunity to discuss. It is necessary to discuss while thinking. We need to check the grounds of our ideas during the discourse. We need to discuss while thinking about new issues. We need to discuss while fixing our thoughts. We need to talk in multiple explanations. You need to use a vocabulary that everyone can understand.

We think that this gives a big suggestion to the teaching method of dialogue in future Japanese school education where dialogue learning is emphasized.

研究分野：教科教育学

キーワード：教室談話 グループコミュニケーション グループ学習

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 学校教育における児童生徒のグループ学習でのコミュニケーション力を向上させるための具体的な方法を明らかにするためには「グループ談話では何が起きているか」「児童生徒は自身の談話をどう見ているか」についての社会言語学的アプローチによる談話研究が必要である。

現在の学校教育への要望として、21世紀の世界に生きる者として、児童生徒に確かな能力を付けるため、能動的で協働的な学習を進めていくことが求められている。このことは「学びにおける協同の意義：「学びの共同体」の場合」(佐藤 2014)や「対話による学び」の実践的評価」(三宅 2014)の報告でも指摘されている通りである。これまでの講義形式での学習や、個人で始め、個人だけで学び、個人で完結するような学習ではなく、複数の学習者とかかわり合いながら能動的、協働的に学ぶことの必要性が指摘されているのである。しかしこの問題は、学校教育学の方法論だけでは解決できるものではない。

能動的、協働的な学習は、実際の学校現場において、「グループ学習での話し合いによる学び」という方法によって進められることが多い。しかし、「グループ学習での話し合い」を進めていくことは簡単なことではない。教師が「さあ、話し合いなさい。」と指示しても児童生徒が話し合いを進められるとは限らない。教室に見られる光景は、机を合わせてグループの形式になっているが、個々の学習者が寄り合っているだけで、それは創造的なものではない。話し合っているように見えるグループ談話は、単なる個人の報告会にとどまっていることが多い。

「グループ学習での話し合いによる学び」がうまく進まない原因は、真正な「グループ学習での話し合いによる学び」を経験している児童生徒が少ないことと、有効な指導方法をもたない教師が多いことである。現職教員の研修会でも、「グループ学習での話し合いによる学び」の指導方法について検討する機会はない。わずかに見られる「話し合いの進め方」の研究は司会の役割や記録の残し方などの「型」の研究に過ぎず、学校教育学としての有効な改善策は管見の限りない。

(2) 本研究は、児童生徒のグループ学習でのコミュニケーション力を向上させるための具体的な方法を明らかにするためには社会言語学的アプローチによる談話研究が必要であるという考えに立脚している。

学校教育学的からは取り上げられることが少ない「グループ談話の参加者として他の参加者とどのようにかかわっているのか」、「談話を連続させるためにはどのようにかかわればいいのか」、「音声のやりとりの特徴はどのようなものか」、「話し手と聞き手の交替はどうすればいいのか」、「通じている(通じていない)ことを現象としてどのように判断すればいいのか」、「語彙や文法から伝え合いを深めることはできないか」、「発話スタイルの違いと理解の違いは関係あるのか」というような現象を省察した問題意識でグループ談話を検討することが必要である。

参考になる研究には、発話のレジスターと授業展開(茂呂 1997)、共 - 成員性(串田 2006)、あいづちの影響(柳 2003、権 2004)、談話標識(森山 1989、富樫 2002)間投表現とのかかわり(内田 2001)、話し言葉の接続(太田・井佐原 2003)などがあり、社会言語学の研究成果に学ぶところが多い。しかし、社会言語学的研究や教室談話研究においても、小学生や中学生のグループ談話を研究対象とし、談話中の児童生徒自身による瞬時の自己評価からの研究は管見の限りない。

2. 研究の目的

本研究では、学校教育における児童生徒のグループ学習でのコミュニケーション力を向上させるための具体的な方法を明らかにすることを目的とし、「グループ談話では何が起きているか」「児童生徒は自身の談話をどう見ているか」について、社会言語学的アプローチによる談話研究を行う。そのための研究課題は、以下の通りである。

課題 : 小学校や中学校の授業でのグループ学習において児童生徒のグループ談話はどのように進められ、グループ談話では何が起きているのかを明らかにする。(課題 : グループ談話の傾向の調査)

課題 : グループ談話がうまく進む(進まない)場合の要因を類型化し、グループ談話を創造的なものにするために必要なコミュニケーション力を明らかにする。(課題 : グループ談話の様相の類型化と創造的なグループ談話に必要なコミュニケーション力の検討)

課題 : 談話に必要なコミュニケーション力によって改善したグループ談話のグループ学習への効果を測定する。(課題 : グループ学習への効果の測定)

3. 研究の方法

本研究では、以下の方法で社会言語学的アプローチによる談話研究を行う。

課題 および課題 にかかわる研究方法

本研究での文献による基礎研究は、教室談話、音声言語研究、社会言語学、談話分析、応用言語学、談話文法、日本語学、国語科教育関係のものを中心に行う(課題)。

課題 および課題 , にかかわる研究方法

小学校及び中学校における実証研究は、談話状況のリアリティを再現するために動画記録からトランスクリプションを作成し、グループ談話の傾向の調査を行う(課題)。次に、トランスクリプションの詳細な分析から、グループ談話の様相の類型化を行う(課題)。さらに、児童生徒が談話状況を瞬時にモニタリングし、談話の参加状況やそのときの意識、相互行為の事実について自己評価することで、創造的なグループ談話に必要なコミュニケーション力の検討と改善したグループ談話のグループ学習への効果の測定を行う(課題)。

課題 にかかわる研究方法

児童生徒への調査/学年のはじめ(4月)からグループコミュニケーションについて積極的な指導を行った学級において、質問紙によって、学年の後半(1月頃)に児童生徒に対してグループコミュニケーション力についての意識調査を行う(課題)。学級の傾向の可視化調査/調査は、全11学級(小学校2年/1学級、小学校4年/2学級、小学校6年/3学級、中学校1年/3学級、中学校2年/1学級、中学校3年/1学級)で行う。その結果を学級ごとに一覧表(児童生徒が選択した項目の数と自由記述を一覧にしたもの)にする。また、全学級の結果を一覧表にする。指導教員への調査/「児童生徒が選択した項目の分布と自由記述の一覧」と「学級ごとの児童生徒が選択した項目の分布の全学級分の一覧」を各教員に配布し、自身の学級の傾向や自身の指導の実際、他の学級と比較した相対的な所見を収集する。結果の考察/各教員が記述したものを集約し、その傾向を検討し、グループコミュニケーション力を習得するために有効と考えられる指導方法について考察を図る。

4. 研究成果

課題 小学校や中学校の授業でのグループ学習において児童生徒のグループ談話はどのように進められ、グループ談話では何が起きているのか。

「グループ談話では何が起きているか」という問いについて360度全方向カメラでの録画映像およびそのトランスクリプションの分析から次のことを明らかにすることができた。

- ・ 同じ学習者でも参加するグループの談話の様相によって発揮できる力は異なる。
- ・ 「理解を深めること」と「談話を連続させる」ことは同じではないが、どちらもグループ談話を進めることには変わらない。
- ・ 談話の参加者には聞こえているだろうが、談話の参加者が必ずしも聞き取っているわけではなく、共有されているとは考えられない発話も少なくない。
- ・ 発話の連続がなくてもグループでのやりとりが成立していることはある。
- ・ 談話に参加していなくても発話を聞いて取り入れている学習者はいる。
- ・ グループ談話では発話は重なることが多い。
- ・ グループ談話のペースはそれぞれに異なる。
- ・ いわゆる「話し合うこと」だけではなく創造的なグループ談話は他の活動(線を引く、てびきを読む、メモをとる、文を書く)と併存しながら進められている。

課題 グループ談話がうまく進む(進まない)場合の要因を類型化し、グループ談話を創造的なものにするために必要なコミュニケーション力を明らかにする。

「グループ談話を創造的なものにするために必要なコミュニケーション力はどのようなものか」という問いについて360度全方向カメラでの録画映像およびそのトランスクリプションの分析から次のことを明らかにすることができた。

- ・ グループ談話がうまく進む場合の要因を類型化すると以下ようになった。
- ・ 談話の参加者間で、価値理解ができているとグループ談話がうまく進む。
- ・ 談話の参加者間で、談話の運営ができるとグループ談話がうまく進む。
- ・ 談話の参加者が、思考操作しながら談話を進められるとグループ談話がうまく進む。
- ・ 談話の参加者が、言語操作しながら談話を進められるとグループ談話がうまく進む。
- ・ 談話の参加者が、語彙操作しながら談話を進められるとグループ談話がうまく進む。

このことから、グループ談話を創造的なものにするために必要なコミュニケーション力には次の10の力があることを明らかにすることができた。

- 《談話の価値理解にかかわる力》
 - 談話の参加者を尊重する力
 - 談話の価値を共有する力
- 《談話の運営にかかわる力》
 - 談話の参加者間で見通しを立てる力
 - 談話の参加者間で発話機会を提供し合う力
- 《談話の参加者の思考操作にかかわる力》
 - 談話中に情報を思考操作する力
 - 談話中に自分の考えの根拠を点検する力
 - 談話中に問いを更新する力
 - 談話中に自分の考えを修正する力
- 《談話の参加者の言語操作にかかわる力》
 - 複数の方法で説明する力
- 《談話の参加者の語彙にかかわる力》
 - 共通の語彙を使う力

課題 談話に必要なコミュニケーション力によって改善したグループ談話のグループ学習への効果を測定する。

「児童生徒は、これらの力をどのように習得するのか」「教師はこれらの力をどのような方法で指導すればよいか」という問いについて360度全方向カメラでの録画映像およびそのトランスクリプションの分析、そして、それぞれの教室で指導を行っている教師および教室談話の参加者である児童生徒への調査から、グループコミュニケーション力を習得するために必要な教師の指導方法として次のようなことがあることを明らかにすることができた。

- ・ グループコミュニケーション力の学習として言語化（可視化）すること
- ・ グループコミュニケーション力をはたらかせる切実性のある学習課題を設定すること
- ・ グループコミュニケーション力を育成する計画を立てること

今後の課題は、社会（学校現場）に貢献できるように、この10の能力を育成するための指導法としての「グループコミュニケーション力の学習として言語化（可視化）すること」「グループコミュニケーション力をはたらかせる切実性のある学習課題を設定すること」「グループコミュニケーション力を育成する計画を立てること」の方略を具体化することである。

学校現場の指導法としての実用性を高めるには、それぞれの効果を測定し、児童生徒の個々の能力やグループの構成の違いによって異なる効果的な指導法を類型化することが効果的である。そうすることで、今後、さらに増えていく学校教育現場におけるグループ学習の質を高めていくことができると考えられる。この研究を継続していくことが、若年教員が増え続け、教育力の低下が懸念される日本の教育事情に対して教育力を高める実践的指導理論としての一助となり、社会還元になるものであると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- 達富洋二, 「創造的なグループ談話を創造するために教師が行ってきたことのリフレクション」, 『九州国語教育学会紀要』第8号, 査読有, 2019, 九州国語教育学会, 70-86
- 中尾聡志・達富洋二, 「創造的なグループ談話に必要なコミュニケーション力とはどのようなものか」, 『九州国語教育学会紀要』第7号, 査読有, 2018, 九州国語教育学会, 54-66
- 達富洋二・田崎信子, 「グループ談話では何が起きているか」, 『九州国語教育学会紀要』第6号, 査読有, 2017, 九州国語教育学会, 89-108

〔学会発表〕(計3件)

- 達富洋二, 「グループ談話の参加者が「この談話を創造的なものにしよう」と自覚することの効果」, 第9回九州国語教育学会福岡大会, 福岡教育大学, 九州国語教育学会, 2018.09.22
- 達富洋二, 「国語科学習におけるグループ談話の傾向 - グループでは何が起きているか - 」, 第8回九州国語教育学会福岡大会, 福岡教育大学, 九州国語教育学会, 2017.09.09
- 達富洋二, 「小中学校国語科におけるグループ談話の傾向」, 第7回九州国語教育学会福岡大会, 福岡教育大学, 九州国語教育学会, 2016.09.10

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。